

はじめに防御ありき ～命のともしびを消さないために～

四国経済連合会副会長(大倉工業株式会社代表取締役会長) 鴻池 正幸



五年前、過労と不摂生がたたり、命の灯が消えかけたが、幸いにも周囲の温かい励ましと家族やすばらしい医師達が奇跡を起こしてくれた。誠に厳しい試練であり、これまでの生き様を見直しこれからどう生きるべきか、いろいろと考える機会を持つことができた。

私の今を導いた最も信頼する気鋭の主治医のモットーは「患者様の満足がすべて」。彼は私にDisease-Freeとの診断を下した後で、「予防こそが自分の医師としての最も大切な仕事だ」と語った。たとえばガンとの戦いは、ガンになってからの戦いでなく、ガンにならないための戦いが先決。ガンにならないければ苦しい戦いは不要なのだ。

因みに、ガン手術の回数が多い有名病院や治療実績の多い医師の格付けは山ほどある。しかし、懸命にがんばっている予防の名医や有名病院の所在やランキングを見たことがない。努力の甲斐無くガンになれば、次なる選択は苦しい化学療法や手術である。そうなるに誰しも名医に身を託したくなるのは至極当然である。

人々は、マスコミにも影響されて、手術をはじめとする治療の成功確率の高い医師を名医と呼ぶ。だから名医あるいは名医になろうとする医者は、成功確率の低い対応はしたくないということになるおそれがある。治療の成否は年齢

やガンの進行度合いに左右されることが多く、かくして確率論はチャレンジ可能な治療の免罪符となり、個人ごとに異なる可能性や「Window of Opportunity」を見落としかねない。

一方予防は確率の問題でなく、すべての患者と患者予備軍への医師の本来的な使命であり、基本的なサービスだというのである。

主治医とのこうした議論はコンプライアンス上の問題、品質、労務、安全衛生等々、企業のリスク管理にも殆ど当てはまることは多言を要しない。経営者は、不祥事発生時の謝罪のタイミングや頭の下げ方、事後処理方法などについて知らないよりは知っていた方がいいが、覆水は盆に返らないことを肝に銘じたい。まさに私の実感である。

我々は「問題発生を未然に防止する」システムや活動を日常業務にビルトインするために毎日格闘するしかない。

きれいごとや理想を語ることを憚る時代のようなのであるが、医療の本質やあるべき経営、さらには政治のあり様について、原点を踏まえた議論と実践が求められているのではなかろうか。我がドクターは今日も日本の北から南までの多くの患者にアドバイスし、請われて中国の医療水準底上げへ奔走している。